

氏 名	岩 田 芳 子
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 の 番 号	甲第 181 号
学位授与年月日	2015（平成 27）年 3 月 20 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	古代における表現の方法
論 文 審 査 委 員	主査 平舘英子（日本文学専攻 教授） 副査 石井倫子（日本文学専攻 教授） 副査 高野晴代（日本文学専攻 教授） 副査 永村 眞（史学専攻 教授） 副査 内田賢徳（京都大学名誉教授）

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

古代の神話や伝説において「もの」の機能や質の表現性はどのようなものだったであろうか。本論文は、『古事記』『日本書紀』『風土記』における「もの」の表現を分析することによって、古代における「もの」の機能と質を理解し、神話や伝説の内部に存する古代的、神話的な発想を明らかにすると共に、それらの歴史的社会的な状況における変化をも把握することを目的とする。なお、「もの」とは、自然物なども含む広い意味で、形ある物体・物品一般をさして言うが、本論文では、道具としての機能を有する「もの」を対象とする。

「もの」が内包する機能と質には、道具という枠を超えた意味がさまざまに見られることがあり、そのあり方は時代や状況に応じて変化する。文章表現の一部として「もの」が表れる場合、それは「もの」の有するさまざまな機能や質の一部を限定的に把握して、ある限定された意味を掬い取っていると考えられる。現実の生活のなかで「もの」の道具としての有効性を示す機能と質は、神話・伝説の文脈にあらわれる表現と不可分の関係にあった。ただし、文学としての表現という営為において、「もの」の限定された意味が扱われるためには、生活の中で漠然と存在する「もの」の機能と質に包含される意味が人々に把握されて、意識の俎上にあげられ、共有され、さらに了解される段階を経ている必要がある。さらに文章の制作の段階において作者によって改めてその限定された意味が認識されていないといけない。「もの」を文脈に即した表現としてあらわすための方法がそこに存したと考えられる。つまり、文章表現としてある「もの」は、当時の生活の実態、即ち民俗的営為における「もの」の機能や質に対する把握と、そこから抽出される意味に対する理解を経ているのである。本論文では、漢字或いは漢文で記された『古事記』『日本書紀』『風土記』の文章の分析を通して、「もの」の機能と質に聯想、或いは類感される事柄とそこに抽出される意味を見出し、かつその意味を精査した。それにより、古代の文学における発想と表現の方法について検討した。

第一章では、「もの」の機能や質が表象する意味を、文章に表現されるあり方において「杖」と「剣」を

対象に考察した。

第一章第一節では「杖」を考察の対象とし、『常陸国風土記』行方郡条の夜刀神伝承にあらわれる「標の柵」の位置づけについての検討を行い、古代における「杖」の表現性を考察した。まず「杖」を取り上げたのは、神話から伝説への変化をその機能や質から導かれる意味の変化として把握できるためである。本論文において「もの」の表象性の展開を見渡した、基礎となる考察である。

「杖」の把握のされ方には、神話的世界において祝福を志向するサキハへ性と、邪を退けるサヘギ性という両面性が見られる。文脈から神話的と推測される、神や天皇が巡幸する場において、神や天皇が持つ「杖」の機能にはサキハへ性が表れる。神は赴いた土地で「杖」を衝いてそこを鎮め、安定を齎すという祝福を与えて占有する。天皇の国見はその再現として見るができる。「杖」は神や天皇の手に持たれることで所有者の一部となり、土地との交感を可能とするのである。一方、サヘギ性は、所有者が「杖」に託す権威によって平定を行い、安定を齎すはたらきである。これはサキハへ性が積極的に祝福を与えるのとは逆に、災いを忌避することで統治する、消極的なあり方と言える。所有者の意志が託されていればよく、「杖」と切り離されても機能する。土地に立てられ、そこに残された「杖」は、土地の支配と所有者の権威を象徴するものとして意識され、そこに「占有標識」としての意味が要請される、より実態的なあり方である。

『常陸国風土記』が載せる「標の柵」は、夜刀神と人の住む場所を限る境界に「標」として設置されている。この展開は、後次的な「杖」のサヘギ性が把握される過程を経たうえで成立したと考えられる。夜刀神伝承において、サキハへ性からより実態的なサヘギ性へと移行していることが見受けられるのである。サヘギ性の新しさは古代の蛇神に対する意識の展開とも対応しており、「杖」が表象するサキハへ性からサヘギ性への展開が、神話から伝説への展開として表れることを示した。

第一章第二節「剣考」では「剣」をめぐる神話と伝説をとおして、潜在的に霊的な質を把握される「もの」への理解とその展開について考察した。一では、「剣」に霊異を内在させるタケミカヅチの神話における『古事記』の理解について、二では霊異を持ちえなかった「剣」について記された「異剣伝説」において『播磨国風土記』の方法についてそれぞれ検討した。

第一章第二節 - 一では、タケミカヅチの神話を扱った。『日本書紀』では剣神という把握を出ないタケミカヅチの存在が、『古事記』ではその把握に基づきつつも雷神としての性格がその表記「建御雷神」に表れているという相違に着目し、タケミカヅチが所有するところの「剣」が神の性質とどのように関わり合うか、『古事記』の理解を中心に論述した。

タケミカヅチは、国譲りのために地上に派遣され、イザサの小浜に降ったとき、自らの「剣」を逆さまに立て、その先端にあぐみし、高天原の意向を申し渡したという。この伝承は、『古事記』と『日本書紀』（第九段正文）に見られる。タケミカヅチが十掬（握）剣を逆さまに立て（「逆刺立」〈記〉、「倒植」〈紀〉）た行為は剣神・タケミカヅチによるその地の占有をあらわすと考えられる。そして、刃の先端を上方に向けていることについては、それが神の憑り代であることを表すと同時に、刃に発せられる霊威が上方に向かって顕現していることを示している。そこに顕現されるのは剣の先端にあぐみするタケミカヅチである。その姿に「剣」と一体であることが把握されたと考えられる。ただし、『古事記』では「剣」を「浪の穂」に逆さまに「刺し立てた」と表現する。それは剣の神の表出と雷電をあらわす『古事記』の方法でもあることを考察した。タケミカヅチ（建御雷神）は、天鳥船との関係、水を制禦すること、力比べをすることなどの要素において雷神としての質が表現上に具体化されている。「剣」は所有者のあり方とより強く結びつけられ、タケミカヅチ（建御雷神）の威勢をあらわす雷電の表象としての意味を引き出されているといえる。

「剣」が「杖」と異なるのは、「剣」は殺傷する道具としての機能によって、潜在的に靈威を把握される「もの」であるということである。神に手離された「杖」が、神の記憶を留めるのみであるのに対し、タケミカヅチの「剣」は単独で降下されたときに神格化し、その意味は新たな展開を導いている。

第一章第二節 - 二では、地誌である『播磨国風土記』の方法について、一地域に保管されてある、靈威を持たない「剣」の伝承（異剣伝説）の記述という問題を通して、検討した。異剣伝説の構成や表現には、これまで靈剣の伝説との類似が指摘されてきた。「剣」を手に入れた丸部の家の滅亡が語られること、「剣」が「刃不<sub>レ</sub>渋、光如<sub>二</sub>明鏡<sub>一</sub>」「此剣、屈申如<sub>レ</sub>蛇」と表現されることが、それにあたる。しかし、「剣」は売買の対象になっており、仲川里の御宅に安置されるものの、祀られることがない。それは、「剣」が靈剣ではないことを示している。『播磨国風土記』は異剣伝説で、靈剣を思わせつつ、その意味を「記さない」という方法によって、靈剣でも単なる武器でもなく、しかし保管されるべき理由のある「剣」について記している。この方法は、「剣」が朝廷へも献上された、里にとって特別な「もの（宝剣）」ではあることを説明するために工夫された、その結果としての表現方法であった。

来歴を語られて大切にされる「剣（刀）」の中には、靈威あるとされるものから、祭祀の対象ではないけれども特別視されるものが存していたと推測される。しかしそのような伝承の発生、そしてそれを記そうとする試みにおける方法は、神話における靈異ある「剣」に対する理解無くしては成立しえないものであるだろう。『播磨国風土記』の記述方法はそうした展開の一つのあり方として捉えうる。

第二章では「もの」の機能や質に類感するあり方とその表現方法について「針」と「鉤」を対象にし、その表現性の展開を考察した。第一節では、「針」をめぐる伝説について、苧環型とされる説話のなかで、もっとも古い例である崇神記の三輪山伝説と『肥前国風土記』弟日姫子譚を取り上げ、古代の苧環型説話における表現の手法とその展開を論じた。

第二章第一節 - 一、三輪山伝説では、「針」の機能と質に託された古代の神話的な発想への了解が、表現の方法に取り込まれる様相をあきらかにした。崇神記では、この伝説の記載の前に三輪山の神の子孫である意富多々泥古の系譜を示しており、夜ごと活玉依毘売を訪れる「壮夫」が神であることは、文脈において前提としている。その三輪山の神は、『日本書紀』の記述から当時蛇体をもつ神として認識されていたと推測される。しかし三輪山伝説では神の姿を直接的に示さず、「見えざる」ものとしてある。「見えざる」神は「紡麻」を着けた「針」を刺された状態で山に帰ったとされる。つまり「針」はここで、神が進み行く状態を視覚的に認識できる唯一の「もの」として意味をもったのである。「針」は「見えざる」神の存在を顕示する「標<sup>しるし</sup>」としてある。そこには、「針」の基本的な質である「縫う」機能、日常生活で縫物をする経験から、ものを縫い合わせる時の動きが想起される。S字型のその動きは、蛇の動きと近似し、「針」が「紡麻」を導きつつ山へと帰る蛇神の行動と重なる。「針」の動きには、「見えざる」神の蛇体が類感されたのだ。「紡麻」をたどる活玉依毘売が「神社」に行き着いたことは、「壮夫」との婚姻関係が神との婚姻関係として再構築されたことを意味している。その関係を視覚的にあらわす「紡麻」は縫われた結果の確かな繋がりとして意味を持つといえる。三輪山伝説と類似の苧環型説話である弟日姫子譚には「針」が表れないが、そうした「針」の表現性がその背後にあると考えられる。「針」を持たない弟日姫子は神ではなく異類と接触し、死に至っているからである。苧環型の説話の「針」が、未だ神の存在を表示する「もの」として意識されるところから殺傷性をもって異類を殺す「もの」へと展開する、その発想の展開を予見させる表現性が窺えた。

第二章第一節 - 二、『肥前国風土記』の弟日姫子譚では、伝説の地域性について考察した。弟日姫子譚は、宣化天皇の時代の松浦郡篠原村の弟日姫子と大伴狭手彦との別離譚とその後日譚によって構成される。舞台となる地域の地理関係は、褶振峰（現在の領巾振山（鏡山））が当時、栗川（鏡渡）（現在の松浦川或は

その支流)を境界として篠原村と隔絶された土地であったことを考えさせる。それを、別離譚の弟日姫子の足取りと結果としての後日譚を検討することで把握できた。

峰に棲む「身人・頭蛇」の者が、狭手彦の姿となって弟日姫子のもとを訪れた原因は、前半の別離譚において弟日姫子が狭手彦の形見の「鏡」を川に落とし、峰で「褶」振りを行った、その二つの行為にあると解される。異形の蛇は、「褶」振りによって呼び寄せられ、狭手彦の姿が映し出された形見の「鏡」を見たことで、狭手彦の姿となって弟日姫子の前に現れたという展開が読み取れる。弟日姫子の行為が「鏡渡」や「褶振峰」の地名起源となっていることは、当時その山は人が日常的に登る場所ではなかったことを推測させる。『肥前国風土記』はそうした土地の状況を反映して、弟日姫子の伝承を記していると考えられる。土地の実情に即した『肥前国風土記』における伝承の記述方法が窺われた。

なお、弟日姫子譚には「針」に関する記述は見えないが、苧環型の伝説の表現方法における三輪山伝説の特色を明らかにするために「針考」に収めた。

第二章第二節では、『肥前国風土記』と『古事記』『日本書紀』の三書に記載されている神功皇后の年魚釣り譚について、『肥前国風土記』の伝承の記述方法を探ることを目的に、「鉤」に対する理解について比較検討を行った。豊穰を予祝する意義を有する行事の起源を、三書はそれぞれの意図において伝えている。神功皇后が行う新羅遠征の成功を占う話として伝える『肥前国風土記』と『日本書紀』は、ウケヒの構造を有している。ただし、『肥前国風土記』が神功皇后の占いの発言を「祝」と表記することは、ウケヒの中でも豊穰に繋がる吉を願う判断であることを示している。そして、「針を勾げた鉤」は川に投げ入れられる前に、捧げられる。その行為によって、「針を勾げた鉤」は豊穰をもたらす呪具となり、「飯粒」「裳の糸」にもそれは聯想される。それらの「もの」が神功皇后の「祝曰」という呪言と共に、豊穰を表象する奇瑞を生んでいることが、予祝を模倣する四月の年中行事の継承に繋がることを示している。一方、『日本書紀』は占いを「<sup>うけひ</sup>祈」としている。皇后の釣りを土地の行事の「起源」としてよりも、神功皇后の新羅遠征の業績が行事という形で残っていることを中央政権の立場から記述しているためと考えられる。

この相違は地名起源のあり方においても認められる。『肥前国風土記』では、「進食」は地の神に食を差し出すことと考えられ、その結果地の神からの瑞祥が与えられることによって、それは地名起源という「進食」した者による祝福へと繋がる。『日本書紀』では地の神による瑞祥はなく、地名は第三者である「時人」によって偶発的に発生するのである。

また、『古事記』は、釣りが戦勝の占いであるとはせず、応神天皇の出生と関わる「裳」への視点が強調される。それは、「粒」の豊穰性と繋がり、来るべき応神天皇の治世を予祝する内容としてあるといえる。

『古事記』『日本書紀』の二書は史書として、年魚釣りの行事の起源譚を利用する。それらと比較したとき、地誌としての『肥前国風土記』は豊穰の予祝を起源とする土地の行事である年魚釣りについて、より本来的な意義を伝える意図を有しているといえる。

以上、『古事記』『日本書紀』『風土記』に記載される神話・伝説における「もの」の表現性について「杖」「剣」「針」「鉤」を対象として検討した。古代において、「もの」の機能や質は、「もの」がどのような表象性を有するかということの根拠であり、また「もの」の機能と質は、神話・伝説の背後にある時代性や地域性、及びその基層にある民俗的営為と深く関与して、「もの」に類感し、ある限定された意味を導くことで、豊かな表現性を示していた。「もの」に感得される表象や意味は、当然のことながら伝承された神話や伝説を記載する者の意図とも深く関わっていることが、本論文における検討を通してまず理解された。そのことは、本論文全体を俯瞰したときに、次の二つの問題として捉えることができる。

一つ目は、古代において「もの」の表現性はどのように展開しているか、という点についてである。古

代における「もの」の表現性が、時代性や地域性と大きく関わると共に、神話から伝説へと展開する表現の方法に組み込まれているという可能性が見えてきている、ということである。そのことは、例えば「もの」と所有者の関係から窺うことができる。神話（「杖」「剣」）では、神との関係において「もの」はその機能や質から意味を含む表現性が導かれるのに対し、伝説ではそうした所有者との関係は流動的で、「もの」が必要とされる状況や場面に即してその意味を表出させていると推測できるのである。また、伝説における「もの」の表現が、神話的な発想を踏まえて、或はそこから脱して現実と連続する伝承を記すための表現へと展開している（「剣」）ことから、その可能性の一端を示すことができた。

二つ目は、「もの」の表現性と各書の記述態度の関係に関する問題である。「もの」の表現性を検討することを通して『古事記』『日本書紀』『風土記』における神話や伝説を記述する方法の相違とそれぞれの意図が浮かび上がってきた。表現は、当然文章の要請に応じて変化するが、そのことが、「もの」の表現性の検討をとおして見出せた。そこには、時代性・地域性による展開が見られた。三書の記述態度の相違は、「鉤考」において検討した。即ち、『日本書紀』が史実を忠実に記す方法を志向するのに対し、『古事記』はそれを緻密に再構成し、結果として文芸性の高い作品となっている。このような『古事記』のあり方は、タケミカヅチの「剣」や三輪山伝説の「針」などにも見られ、ほかの「もの」についてもその可能性が想定される。

また、地誌である『風土記』については、文学的志向をもって神話・伝説を記したものであるという視点を持つとき、それは内容だけでなく、「もの」の表現においても『古事記』『日本書紀』に並ぶ工夫が試みられたことを検証した（「杖」「剣」「針」「鉤」）。地方ごとの筆録者の問題はあるが、中央に示すため土地の伝承をどのように記すか、ということが模索されたはずであり、その文章には当時の神話・伝説における「もの」の表現の一端を窺えると思われる。

## 論文審査結果の要旨

### 審査の概要

本論文は、序章で、棒状の形態を有する「もの」を対象に、上代の文献におけるそうした「もの」の表現を通して、「もの」の質や機能に対する古代的な把握や理解の在り方を分析し、古代的な発想を探るという目的を提示する。その取り組みは、従来「もの」の把握が、「もの」自体に向けられていたことに比べて、文学研究としての、新しい方法として意義が認められる。

第一章「『もの』の表象性」では、杖と剣を取りあげる。第一節「杖考」は、杖という道具が身体の延長であることへの理解に着目し、杖は身体と大地の双方に接触することにおいてその二つを仲介し、身体と大地を交感せしめ、その交感を通してそこに臨む者が土地の内実を感得し、ツクという能動的な所作によって土地の占有を果たすという権能をもつことを、『風土記』を主とする例を多くあげて立証している。ここで神話論的解釈は、身体というタームを軸として独自の方法を持ち、従来の解釈をそのまま適用するのではない斬新さをもっている。杖が土地の占有を果たすという解釈で最も問題視されていた、『常陸国風土記』中の「標税」の「税」について、反切を詳細に分析して、『新撰字鏡』倭訓に「宇太知 ウダチ」と見られるものが、「税」の字音セツに相当する意義であって、

字音タツ、トツに相当するツエの意義とは重ならないことを示すなど、従来の注釈書類に見られなかった新見をあげて、シルシノツエと訓むことを確定するなど高い次元の知見を見せている。その結果、杖の権能について、神話的発想といえるサキハエ（幸）性から、人の世代におけるサエギ（障）性への転換が見られることを論証している。

第一章第二節「剣考」では、「剣」に託される霊的な側面の変化を「タケミカヅチの神話」と「『播磨国風土記』異剣伝説」とに捉えている。一の「タケミカヅチの神話」では、剣神とされるタケミカヅチの表記が『古事記』には「建御雷神」とあって、雷神としての性格が表れていることに着目し、その霊的な側面に「猛々しく勢いの盛んな靈魂」という理解のあることを把握する。国譲りのために地上に派遣され、イザサの小浜で、剣を波の穂に逆さまに立てたという表現に、タケミカヅチと剣との一体化を把握し、杖を立てる行為との類似性を述べる。そこに剣神としての性格と雷神としての性格による、その地の占有と浪の制御との両方の把握があることを『古事記』の表現の方法として論じている。従来の研究の水準に達しているが、逆方向に立てたことと波の制御と武力との関係へのさらなる考究の方向性を示唆する。一方、二の「『播磨国風土記』異剣伝説」においては、新たに蛇行剣を見つけ出したことに意義が認められる。霊剣ではないが、大事にされている「剣」として理解し、それに対して「霊剣」であることを具体的に記さないという方法に『風土記』の判断があるとし、一のタケミカヅチ神話との差異を把握している。こうした表現の方法の把握は、古風土記に書かれている内容が伝説の記載であるのか、記載時期における当代において珍事であるのかという問題に繋がる。文献の記述の態度と関わる問題であり、『風土記』に特有のものと考えてのかどうかという点で、今後の広がり期待される。

第二章「『もの』への類感と表現方法」ではハリ（針および鉤）を扱う。第一節「針考」の一は『古事記』の三輪山伝説を扱ったもので、そこに用いられる道具ハリが、その形状と糸を伴う使用法において蛇身への類感をもつことを指摘し、殺傷の具であるかどうかという従来の議論にとらわれない新しい解釈を提示しているのは印象的である。蛇身としての在り方を持ちながら、『古事記』にはそれが書かれず、類感されるという点への気づきは非常に興味深い。さらに、『古事記』の訓み及びこの伝説の解釈を『萬葉集』の井戸王歌（1・一九）に適用する解し方は説得力をもつ。

第一節「針考」の二は苧環型説話として、三輪山伝説に類似する「『肥前国風土記』弟日姫子譚」を分析する。弟日姫子譚ではハリという「もの」が使われない点に注目して、栗川を挟んだ褶振りの峰と篠原村との位置関係から考察している。両者の地を、考古学上の成果から、栗川を挟んで生活の地域と墳墓の地域と判断するもので、『肥前国風土記』は、そうした土地の状況を反映して、弟日姫子の伝承を伝えているとする。土地の位置関係に着目した点が評価される。また、従来苧環型説話として括られてきた、三輪山伝承との差を際立たせようとした点は興味深い。ただし、考古学上の性格付けについては、一見合理的に見える要素は、扱いが危険な場合があり、より複雑な手続きが必要であること、特に記紀風土記において、語られる時代と語り、記す時代との相違が問題になる点であり、表現の分析においても、異形の者の歌への分析は充分ではなく、また鏡の呪術性といった要素に寄りかかり過ぎている点、弟日姫子を遊行女婦的とする点などは、今後の検証が期待される点である。

第二節「鉤考」については、『肥前国風土記』と『日本書紀』、及び『古事記』における年魚釣り

譚を取り上げ、『日本書紀』が新羅征討へのウケヒの意図を持つのに対して、『肥前国風土記』は豊穰の予祝としての意図を持ち、後の行事化に繋がっていることが説かれている。一方『古事記』は応神天皇の出生譚と関わるものとして表現していることを説明し、三者のそれぞれの立場と表現の在り方との関係性を考察する。土地における「進食」の意味が、従来言われてきた天皇へ食事を進めるという意味とは異なり、土地の神(霊)に食を進め、土地の神(霊)の存在を認める意味をもつことを明らかにした点が評価される。『肥前国風土記』において年魚釣りを「祝」と表記することは、それが土地の行事である年魚釣りの、より本来的な意義である豊穰の予祝たりうることを保証する要素でもある。「祝」字に対する、『説文解字』の解釈は、今後さらに尽くされる必要があるが、「祝」字への着目は、三書の相違を際立たせるものであり、評価される。

最後にまとめとして終章を付している。

## 審査結果

申請論文は総じて先端のとがった棒状の形態を有する道具のいくつかに、神なるものの示現とその権能の顕現が見られる現象を、古代日本の文献がどのように表現したかということをめぐる展開される。その展開には二つの要素が見られる。一つは、そうした現象の神話論的解釈であり、今一つは、それを書記する古代日本語文の文体、即ち意味の定位である。その両者が、見事に論じられているのは第一章第一節「杖考」と第二章第一節「針考」とである。この二論文の成功によって、本申請論文は博士の学位論文にふさわしいものと判定できる。もし、以上の水準で全体が論述されていたら、本論文はまさに当該領域の知見を大いに改めたであろうが、その他の論文については、いくつかの点で再考すべき点がある。

まず第一章第二節「剣考」では、タケミカツチの降臨方法について、神の依り代という観点から、ここは是非折口信夫「髭籠の話」を参照して欲しかった。もっと豊かな視点が与えられたと思われる。更に、「節霊 フツノミタマ」の訓釈で、宣長以来の誤解に検討のないまま従っているのは、問題が残る。「節 断声」という『玉篇』の訓義は、フツがものを断つときの擬声語であることを意味するのではなく、声が途切れることをいう義で（『大漢和辞典』の解が正しい）、この字のよみもフツではなくサフ（徂合切 広韻入声合韻）である。これによってフツノミタマの義も考え直す必要がある。

第二章第一節の、三輪山伝説においても、さらに一歩進めれば、針は三輪山の神の衣に刺されることで活玉依毘売の情念を神の身体に刻印するその道具であり、刺されてある神が蛇身という多義的な姿で—それは正体ではない—示現することを通して、針と糸は、生活の次元と神話領域をまさしく縫い合わせるのだという、もっと魅惑的な解釈に届いただろうと見ると、惜しくもある。「杖考」で見せた身体というキーワードがここに欠けていることが展開を果たせなかった要因であろうか。また、『常陸国風土記』に見える呉伏山伝説などとの関係も視野に入れることが望まれる。

第二章第一節二『肥前国風土記』弟日姫子譚』では、墳墓の地と推定する場所に若い女性は一人居るそこに行かないといった、むき出しの現代的感覚が見られ、また弟日姫子を遊行女婦とするなど、実体化が目立っている。弟日姫子と従女との関係には触れられず、弟日姫子を遊行女婦とするのは問題が残る。更に栗川に落ちた鏡には、沼の主が写るはずだが、狭手彦の姿が映し出されたのを見るとい

う矛盾が説明されていないなど、解釈が不十分な点が見られる。

第二章第二節「鉤考」では、「進食」の考察はよいが、豊穰予祝をめぐっては、年魚釣りをする女が妊婦に限らないことをどう説明するかが、問われるところである。神話的意識と歴史的区分において、読み方が不十分な面があり、より巧みに構えて欲しかったところである。

なお、テキストの扱いについて、底本について本文校訂を自身で行った上でのテキストの扱いであること、古写本が一本しか残っていないものがあることなどについて、説明が不親切であるとの指摘が審査委員からあったことは、留意すべき点と考えられる。

こうした疑問点と共に、序章に示される古代や神話といった概念に揺れがみられ、古代は神話と同義であったり歴史的な時代区分としてのそれであったりする。申請者にはこうした諸概念の確定が望まれる。

申請論文は、従来「もの」の把握が、「もの」自体に向けられていたことに対して、「もの」の表現の精緻な分析を通して、上代文学研究としての「もの」の表現の在り方とそこに見られる古代的な発想を探るという、新しい方法に挑んだ意欲的な論文である。中でも、第一章第一節「杖考」と第二章第一節「針考」とは、論文として高い完成度を示している。この二節をもって、課程博士の学位論文として十分な要素を有している。他の章・節には、挙げたように論述に不十分な点がいくつか見られる。しかし、それは上記二節の高い水準と比してのことであり、他の部分で、独立した論文として当該分野の学会誌に審査の上掲載されているものもあり、全体として当該分野の博士論文としての水準は満たしていると判断される。

以上の審査結果を勘案し、本審査委員会は、全員一致で、本論文が博士論文としての学問的水準に達しており、博士（文学）の学位授与に値するとの結論を得たことを報告する。

上記の判定結果に相違ありません。

2014年10月1日